

平成二十七年 度 金沢学院短期大学入学試験問題（一般入試後期）

国 語

（注 意）

- 1 問題用紙は指示のあるまで開かないこと。
- 2 問題用紙は本文七ページであり、答案用紙は一枚である。
- 3 答えはすべて答案用紙の指定のところに記入すること。
- 4 問題用紙は、持ち帰ってもよい。

問題は次のページからです。

— 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私は昨日、泉のカタワらに立って、ジュラルミンも有刺鉄線も必要のなかった時代のこと、人間のことを思った。樗や梶や杉の巨木を仰ぎ、滾々と流れてやまない水をみて、そういう時代に思いを馳せた。樹齢何百年の老樹がこの一角だけ未だに残されているのは、人がここを一種神聖な場所として感じてきたからであろう。水田を灌漑する水、また飲水を与えてくれる場所として感謝するとともに、もう一步、リガイを超えたところで、源窮水不窮という姿に、一種の形而上的なもの、人力人智以上のものを感じたのであろう。そして、それを畏れ敬したのであろう。神聖なる場所は穢してはならぬ。粗末にしてはならぬ。立ち入ってはならぬ。そういうことを感じ、それを子や孫たちにも言いきかせたであろう。そしてこの泉の湧くところは、村人たちによって畏れられながら、保護され、保存されてきた。ときにここを穢す不埒なものができれば、村人の制裁もうけたらう、所払いにもされたらう。

私はいま「畏れ」という言葉を使った。私がおそれといったのは、  
a に対する畏敬の念である。このごろ「話し合い」という言葉が流行している。話せば解るという前提に立って「話し合う」ことによって、解らないこと、むずかしいことを処理しようとしている。それは一方ではよいことである。自分の意志や思慮フンベツを言葉によって表現できるようになったのは、カクダンの進歩である。同時にしかし他方では、話し合いによつて万事処理できるといふような僭越を、無意識のうちに呼び起してきて<sup>④</sup>もいる。人智や人力で解決できないようなことはないといふケイコウを呼び起してきている。従つて、神聖なもの、人智人力以上のものを認めまいとする。従つて、私のいう「おそれ」といふ感情、情緒も、急速に消失しようとしている。これはなかなか重要な問題を含んでいると私は思う。

美しい泉の湧くところ、樹齢何百年の老木の聳えるところ、昔の人のおそれたところへいつて、ジュースの空缶、サイダーの瓶を捨て、チョコレート<sup>⑥</sup>の銀紙を捨て、樹皮をケズつて我が名を刻み、等々といふ所行も、おそれの感情のないところからは当然に起きてくる。争つて清い水をクもうとして水源を荒すといふことも当然に出てくる。A 有刺鉄線で水源を囲む必要も当然に起こってくる。そして、それを特別に不思議とは思っていない。美しい草花がふみにじられ、若木が倒され、水溜りに空瓶が沈むといふことも出てくる。それを防ごうとすれば、付近一帯に有刺鉄線をはりめぐらして立入禁止にしないでならぬといふことになる。これは単に私が行った泉に限つたことではない。いたるところの観光地、名山、景勝の地において同様である。

世間は右のような所行を往々にして公德心の欠如といふことで説明しようとしている。公德心の欠如は、街頭でも、車中でも、集会

場でも、人間の集まるところ至るところで見られることである。私がここで特に問題にしているのは、社会道徳や公徳心という人間と人間との関係だけの問題ではなく、人間と人間を超えたものとの間の関係、また自分と自分以上のものとの間の関係についてである。もちろん、人は人に対して恐ろしいと感じたり、恐怖心をもったりする。私がそれと区別して「畏れ」という文字を使ったのは、人間の**b**に対する恐怖心とは違った「おそろし」という感情を、それにおいて示したかったからである。社会道徳や公徳心は、教育の仕方、テレビやラジオやジャーナリズムなどを通しての躰けしづの仕方によつて、ジヨジヨにはあるがよい方へ向つているし、また向かうのである。B 私のこゝで言つてゐる「畏れ」の感情は、公徳心の場合のように簡単ではない。というのは、近代という時代は、ここにいう「おそれ」をなくそうとする方向にすすんできたからである。近代化ということは、いわばおそれの感情、情緒を払拭ふっしょくすることにはかならなかつた。十七世紀のデカルト以来、人間理性の力を信じ、理性を正しく行使するならば、世に不可解なことはなにひとつない信じ、人智人力の無限の能力を信ずるといふ方向を辿つて今日に到つた。それが近代をして近代たらしめてゐる根本的な特徴といつてよい。従つて人智人力以上のもの、形而上的なもの、神聖なものを、人智の未発達時代の遺物とするか、無用の長物とするか、または無視するか、そういう方向に進んできている。つまりは、おそれといふ感情を **c** としてきたのである。それがヨーロッパの近代の特色であるが、ヨーロッパはその科学技術的先進性のために、世界のユウイ⑨に立ち、ヨーロッパの近代が即ち世界の近代といふことになつた。日本の近代化は敗戦後においていよいよソクシン⑩されてきたのだから、おそれなどといふ感情が青少年の間から消え去つていったのもまた当然といへば当然であろう。

(唐木順三著 『唐木順三全集第九卷』 筑摩書房による)

問一 傍線部①～⑩のカタカナを漢字に改めなさい。

- |   |     |   |     |   |      |   |      |   |      |
|---|-----|---|-----|---|------|---|------|---|------|
| ① | カタワ | ② | リガイ | ③ | フンベツ | ④ | カクダン | ⑤ | ケイコウ |
| ⑥ | ケズ  | ⑦ | ク   | ⑧ | ジヨジヨ | ⑨ | ユウイ  | ⑩ | ソクシン |



問七 傍線部2における、「重要な問題」とはどういうことか。その説明として、最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間の理性や智力の万能を信ずる近代文明に限界があること。
- イ 人間の理性や智力の万能を信ずる非近代文明に限界があること。
- ウ 人智人以上のものや形而上的なものを信ずる近代文明に限界があること。
- エ 人智人以上のものや形而上的なものを信ずる非近代文明に限界があること。

問八 傍線部3に「世間は右のような所行を往々にして公徳心の欠如ということと説明しようとしている」とあるが、筆者は、「右のような所行」が起きる原因をどのように考えているのか。次の空欄（ ）に適切な表現を文中より十字以内で抜き出すことによつて答えなさい。

「筆者は（ ）の欠如が原因と考えている。」

問九 傍線部4「無用の長物」に最も近い意味のことわざを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 枯れ木も山の賑わい
- イ 場所ふさぎの役立たず
- ウ 猫にかつおぶし
- エ 長いものにはまかれよ

— ① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私はガ<sup>①</sup>ンライ、礼節を気にする型の人間ではない。長年自分ではそう思っていた。挨拶は下手、応答はブツキラボウ、ギリは欠くし、先祖の墓<sup>a</sup>参は長年したことはない。盆暮の挨拶は面倒くさい。葬式はカイボウ<sup>③</sup>という職業柄、止むを得ないが、結婚式には出たくない。ネクタイ着用は嫌い。首が苦しい。こんなことでは、どうせロクな死に方はしない。

この八月にパリとプラハに出張したが、その折に突然意見が変わった。<sup>1</sup> ) 豹変したのか、そろそろ年齢がそういう頃になったのか、つまり頭がボケたのか、なんの故か知らないが、急に礼節が気になってきたのである。

その第一は、飛行機中のオバさんである。私の乗ったのはエールフランスだが、日本航空といった方がよいくらいのもので、乗客は日本人ばかりである。それは結構だが、マドギワ<sup>④</sup>の席にいたオバさんが通路側のテイシユ<sup>⑤</sup>（ではないかと思う）の椅子を踏んづけて通路に出てくるのである。くつろいだ姿、動作で結構といえは結構だが、気に入らないといえは気に入らない。数十年、毎日三時間、電車で通学、通勤してきたが、こういう姿はあまり見たことはない。

A、他国の旗の下である。自宅ではない。ここまですくろいでもいいものか。二番目はプラハのホテル。朝食の時に日本人とわかる六人づれのオバさんたちが、日本人と東ドイツのガイドさんと一緒に食堂に出てきた。私がセンキヤク<sup>⑥</sup>で、当方も日本語がわかる以上、具合の悪い話をされてもいけないと思うから、気をつかって、見ず知らずの人たちではあるが、軽く会釈<sup>b</sup>だけしておいた。その後がいけない。会釈した以上、知人だと思つたらしく、「なになにさんですか」と訊<sup>き</sup>くから、「いえ、違います」と答えたが、そうしたらあとは「失礼」でも無ければ何でもない。あさつての方をパイと向いて仲間どうしで勝手にしゃべっている。当方はアホみたいなものである。

この後、若い日本人の二人づれがホテルに駆けこんできた。私はあとは空港に行くだけで、ホテルの入り口でタクシーを待っていたのだが、男の方がホテルのエレベーター係のおじさんとごちゃごちゃ話している。女性の方が私に気がついてそばに来て、「今日は土曜日ですが、お金が換えられますか」という。つまりその用事でホテルに来たらしい。「換えられると思いますよ」と答え、ちようど換金してあったお金がタクシー代の他に余るはずなので、それを空港でまたドルに換えるのも面倒だと思つていたところだから、「お金ならいくらか余っているからあげますよ」といって、一万円足らずの額を現地のツウカ<sup>⑦</sup>でさしあげた。これは私の趣味でやったことだから、べつに相手がどう反応しようが相手の勝手である。

しかし、ともかくお金を受けとった相手は、金を手に持ったままポカンとしている。そのうちタクシーが来たから、私はサツサと帰っ

てきたが、この場合は礼節の問題よりも、とっさの判断の問題である。それがじつに頼りない。要するにどう反応していいか、わからなかったのであろう。

私がいいたいのは、じつはこのことである。スープの飲み方とか、愛情の表現とか、言葉の問題とか、そんなものはどうでもよろしい。しかし、そんなものとは無関係に、人間なら持つていけるものがあるだろうと思う。大げさに言えば、アウシュヴィッツであろうと、シベリアのシユウヨウ所であろうと、人間が日常から離れて自分だけ異文化の中に入ったとしても、自己の規矩<sup>c</sup>というものはあるはずである。2  
そういう常識が、私たちにいささか欠けているのではないか。それが旅行者のマナーについて私が心配になった点である。

いったい私の同国人は、人間を理解しているのだろうか。B、多くの人が、その時々々の状況にただ反応しているだけなのか。それなら状況が変化すれば、まさしく礼を欠いて平然として気がつかないか、あるいは呆然<sup>d</sup>としてジシツ<sup>9</sup>していて不思議はない。

人間の理解を欠く文化はかならず滅びるはずである。これにはマナーや道徳を教えるでもダメである。人間への理解はある種の真剣な苦勞からしか生まれてこない。私はそう思う。われわれは戦後、物質的な苦勞をできるだけ排除してきた。それはそれでよい。しかし、精神的な苦勞もまた、知らず知らず排除してきたのであろうか。その結果、人間の理解を欠く人間をリヨウサン<sup>10</sup>してきたのだとすれば、將來を憂慮<sup>e</sup>するしかない。

(養老孟司著『からだの見方』ちくま文庫による)

問一 傍線部①～⑩のカタカナを漢字に改めなさい。

- |         |       |         |        |         |
|---------|-------|---------|--------|---------|
| ① ガンライ  | ② ギリ  | ③ カイボウ  | ④ マドギワ | ⑤ テイシユ  |
| ⑥ センキヤク | ⑦ ツウカ | ⑧ シユウヨウ | ⑨ ジシツ  | ⑩ リヨウサン |

問二 傍線部 a～e の漢字の読みを平仮名、現代仮名遣いで改めなさい。

- |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|
| a 墓参 | b 会釈 | c 規矩 | d 呆然 | e 憂慮 |
|------|------|------|------|------|



